

# 新世界を伝える

## 《遠くのまだ見ぬ世界》

「まだ見ぬ世界」、かつてそれは「遠い彼方」にありました。「幕藩体制」「鎖国体制」のもとで暮らしていた人々にとっては、手の届かない謎めいた世界でした。

国内各地の様子は、「道中記」や「旅日記」などに描写されています。江戸末期には、名所旧跡社寺仏閣の由緒来歴に風景描写を書き添えた「名所図会」などの図解も盛んに刊行され、巡礼の流行とあいまって、各地の様子を広く「ツタエル」貴重な情報源となっていました。

「実に日本人は大の旅行好きである」、幕末期・明治期、二度にわたって日本に滞在した英国外交官アーネストサトウによる日本人評の一節です。こうした印象を与えた理由としては、『東海道中膝栗毛』などの戯作、「富嶽三十六景」「東海道五十三次」のような浮世絵のヒット、そして物見遊山のブームなどを挙げることができます。

当時の人々がイメージとして抱いていたであろう海外の様子をさぐるには、「漂流記」や、地域で語り継がれた「……譚」など、に言い伝え的に潜む事実を想像たくましく掘り起こして組み立てるほか、有効な手立てがありません。

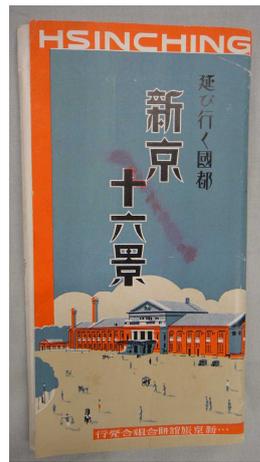
## 《「新世界」＝「未知の世界」 遠くのまだ見ぬ世界へのマナザシ》

明治以降、「情報の増加」そして「記録の蓄積」がすすみます。文書記録だけでなく、写真や絵はがき、測量に基づいた正確な地図など、「遠くのまだみぬ世界」を正確にとらえることのできる材料が増えていったのです。加えて、「交通網の発達」「余暇の増加」が未知の世界と日常との距離感を縮めました。人々のあこがれを、より幅広く、より奥行きのあるものと変化させていくことになったのです。

「未踏の地」に寄せられた好奇心を越えて、やがて、政治的経済的な欲求が、こうした記録の重要性を高めることになりました。その底流にあったのは、近代国家日本の威容を内外に示す意味から、「まだ見ぬ遠い世界」を、支配や制圧のための「新世界」として位置づける流れでした。

欧米列強による植民地化からはかろうじて逃れることができたにせよ、明治日本は「不平等条約の改正」という外交課題に苛まれ続けます。「外からどのように見られているのか」「とにかく強く見られたい」という選択肢が課題解決の方策として最優先されることとなります。そうしたスキームのもとに、明治以降、北海道・朝鮮・台湾・樺太・満州などの「未知の新世界」への目が向けられることになっていきました。各地の「風土・人情・殖産」に関する現状分析が将来展望を描くための基礎資料として必要とされたのです。移り住んで現地に適合して新しい営みを支える、「拓殖」という目線の行き着く先には「侵略」の文字がちらつき始めます。

近代、とくに日清・日露戦争後（明治末期以降）の旅行案内・視察記・訪問記に漂う「ツタエル」の意味合いには、「新世界」への好奇心がもたらす「見聞」「遊覧」という要素に加え、明らかに将来的な支配を意識した「下見」的な目線をその底流に感じずにはられないのです。いつしか「豊穰」「雄大」「富源」のような言葉に覆い尽くさ、近代国家としての対外的膨張を満たす「新世界」としての意味合いが色濃くなっていきました。最終的には侵略制圧のステージに足を踏み入れることになり、「ツタエル」のニュアンスが大きく変化してしまったのです。



#### ▲朝鮮・満洲地域の様子を伝える各種案内書

- ①左)「朝鮮旅行案内」(昭和12年3月、朝鮮総督府鉄道局) / 三由家29
- ②中左)「慶州」釜山大邱鎮海馬山閑麗水道智異山(昭和12年版、朝鮮総督府鉄道局) / 三由家29
- ③中右)「延び行く国都 新京十六景」絵葉書ジャケット(昭和12年か、新京旅館聯合組合) / 雨村家90
- ④右)「奉天事情」(昭和11年、奉天商工会議所) / 三由家29

①から③には旅情をそそる「憧憬」のニュアンスが漂っていますが、④には奉天を拠点とした経済発展の欲望を強く感じさせます。裏面には「大奉天全図」として詳細な市街地図が印刷されています。

#### 《遠くはまだ見ぬ世界をツタエル》

今回の小展示では、近代を迎えた日本人にとっての新天地を「新世界」として伝えた資料のいくつかを紹介してみます。

現地の情報分析に重きを置いたものもありますが、「旅行案内書」という切り口でそれらの資料を集めてみると、そこに色濃く浮き上がってくるのは、「あこがれ」という感覚です。外地ではありましたが、朝鮮・満州・台湾各地を訪れることは、国内旅行の延長と認識されるようになってきます。国内の鉄道交通網の形成と、海上航路の整備が組み合わさった結果でした。

近世から近代へ、徒歩から鉄道へ、そしてさらに旅客航路へ、移動手段の変化によりもたらされた移動時間の短縮は「遠い世界」へのあこがれを人々の身近に引き寄せてくれました。さらに、印刷技術の革新により、インパクトの強い、豪勢な旅行案内書が刊行されるようになりました。『遊覧案内』『神もうで』『温泉めぐり』など、ターゲットを絞り込んだガイドブックも出版されました。

台湾・朝鮮・満洲で、統監府や総督府のもとに鉄道路線の管理と運営を掌握していたのが鉄道局であり、旅行案内書の刊行をも担っていました。各種の旅行案内書には、支配地という名の新世界に張りめぐらされた鉄道路線網が描かれた地図が、写真とともに誇示されていたのです。

「交通の広がり」と定着」は、明らかに人々の日常に広がりをもたらしました。余暇という概念の出現とも相まって、娯楽という感覚が入り込むようになってきたのです。そこには、「美しい」「珍しい」といった感覚や、「非日常」という感覚ももたらされました。案内書も彩り豊かでいっそうきらびやかなものへと変化を遂げることとなります。「大正広重」の異名をとった鳥瞰図絵師吉田初三郎が時代の寵児として脚光を浴びることにもなりました。

## ◆ 1. 北海道をツタエル

明治初期の「勸業雑報」や新聞紙上には北海道の様子や移住者へのアドバイスが多数掲載されています。北海道の様子を伝える記録に一貫しているのは「広大な大地」「産業の好適地」とのスローガンであり、移住者を誘うという基調が前面に強く押し出されています。北海道への誘導には、台風による洪水や高潮などの罹災者や困窮土族への対応という、近代国家が生み出した歪みへの対処という時代の要請もありました。そして、幕末以来の対ロシア政策の意味合いも内包されており、北都旭川を拠点としつつ、道内各地への屯田兵の配置が計画的に進められていくことになります。

余談ながら、明治前半に北の大地で発揮された「開拓魂」は、半世紀の後、満蒙開拓における精神的支柱として巧妙に持ち出されることになります。

## ◆ 2. アジアをツタエル

北海道へのアプローチには未開の原野を「切り拓く」という側面がありました（先住民のことに思いをはせると一方的な価値観の押しつけになってしまいますが……）が、アジア各地へのアプローチの場合には、すでに居住している人々の生活や文化の中にわけいることになることを意味しており、「アジア全体の繁栄」を唱えてはみたものの、結局は侵略や制圧のニュアンスを消し去ることはできませんでした。

アジアのリーダーを標榜した日本にとって、対欧米という意味から、アジアにどのように向き合うかは、重要な課題でした。日本は近代国家としてのステイタスを得るために、「富国強兵殖産興業」のスローガンのもと、対外的な膨張路線のレールを走るようになってしまったのです。アジアは日本の欲求を満たしてくれる「夢の中の光る海」のような存在でした。

旅行者による視察報告や土産話、現地での生活体験者による演説、視察団や領事館による現地状況の報告書刊行などにより、各地の実情が分析を伴って国内にもかなりの精度で「ツタエラレ」ていました。とくに、日清戦争の勝利をきっかけに、省庁府県単位の水産関連の調査報告書や、各地の商業会議所や同業組合によるアニュアルレポートが刊行され、「新世界」を対象とした、『商工事情報告』や『人名録』には、現地での成功者のくらしぶりが美辞麗句にまとわれてきらびやかに紹介されるようになっていきます。さらに、絵はがきや写真帖によって、日本人の手によって整備された町並み（宏壮な建築物、公園整備の行き届いた街区）、鉄橋やダムなどの巨大インフラが紹介されることもしばしばでした。

そこに描き出されたものは、日本人がイメージした「まさに近代的な……」と形容できる光景でした。「狭い」という島国特有のDNAが「広い」ということに対する強烈なあこがれを生み出していたように感じられます。さらに、そこに描き出されているのは、勝者・支配者・成功者の立場によるユートピアの姿でした。



左上)「台湾写真帖」表紙

(明治41年〈1908〉、台湾総督府官房文書課) 山口市木梨家692

右上)「満洲写真帖」見返し

(昭和2年〈1927〉、南満洲鉄道株式会社) 防府市吉川家299

### ◆ 3. 『鶴洲遊蹤』の世界観（磯崎拾玉後篇、〈文書館図書289オ〉） 尾中郁太の記録の世界観

『鶴洲遊蹤』（文書館図書289オ）は、昭和10年（1935）に尾中郁太の古稀を記念して刊行されました（鶴州とは尾中の号）。①「北海道実情視察日乗」（大正12年〈1923〉）、②「満鮮視察日乗」（大正9年）、③「溯江日乗」（明治40年〈1907〉）④附録〔詩文集「南船詩草」〕、の4編（収録順）で構成されています。

慶応2年（1866）生まれ、佐波郡田島（中関村）出身の尾中は、実業家・塩田地主としてその名を知られていません。地元の希望村塾で宇都宮善聴に師事して漢学を修養、その後、京都の青莪塾で佐々木松郷（長州藩家老益田家家臣）に師事、次いで大坂の泊園書院（近代日本の工業化を支えた実業家を多数輩出した漢学塾）で藤澤南岳に師事して、実業や経世思想の造詣を深めます（宇部興産を築き上げた渡辺祐策を支えた紀藤閑之助も泊園書院の塾生）。その後、東京東洋英和学校入学。帰郷後、明治20年には、当時の国内塩業を牽引していた秋良貞臣に随行して、ウラジオストクや釜山に渡航、海外商都の活況をつぶさに見学、ドイツ商社との折衝にあたり、防長塩の販路拡張に成功しています。当時の現地の様子は「浦塩朝鮮遊誌」〈一般郷土史料339〉に詳述されており、明治期のきわめて早い時期の朝鮮方面の視察報告として貴重です。

さらに、三田尻塩田大会議所頭取・防長塩田組合長を歴任、義弟古谷熊三とともに塩田貯蓄銀行を運営したほか、華浦銀行・防府電燈の重役を務め、県会議員にも選ばれています。さらに、中関村の華南図書館設立（明治37年、学校に併設された本格的な村立図書館としては県下最古）に寄与した文化人としても知られています。

『鶴洲遊蹤』は、訪問先の景勝地の紹介などをおりませた紀行文ですが、あくまでも実業視察報告であり、現地の将来展望にまでその筆は及んでいます。

華南地域の経済状況の報告である「溯江日乗」のなかで、日清戦争の戦勝国日本にとって「支那開発は天職である」とする使命感のもと、揚子江流域の経済的な好望を強調しています。ここで重んじられていたのは経済的な好望を支える要因としての「地理人情」の把握でした。こうした理解には漢学で培った素養が大きく役立ったようです。尾中は、開明的な実業家との評価を得ていますが、そのよってたつところは経済的な覇権主義です。当時の日本人のアジア観が凝縮されたレポートとも言えるのです。

大正期の満鮮視察と北海道視察は、県からの要請により編成された視察団によるものです。前者は中川望知事を団長として組織され、「防長新聞」「馬関毎日新聞」「防長実業新聞」がスポンサーになっていたことから、紙面には、逐次視察報告が掲載されています。視察の目的は、現地での産業振興への道筋をつけることにありました。視察団には当時の山口県内の気鋭の政治家や実業会の重鎮がその名を連ねていました。経済誌「日本之関門」の主筆柳広一の名前も見えます。

「満鮮視察日乗」の題字は枢密院顧問（台湾総督経験者）上山満之進（防府江泊出身）によるものです。巻頭言を寄せたのは防長新聞主筆の野原祐三郎（秋草）。明治末年以来「馬関毎日新聞」「防長実業新聞」「防長新聞」で山口県の勸業に関する提言を繰り返していた野原は、アジア振興に関する尾中の先進性を絶賛しています。そして、冒頭の「一葦帯水、隣域、風物雄大、資源に富む、内地生産品移出の余地がある・・・」の部分に当時のアジア地域に向けられた日本人のまなざしが凝縮されています。

地理的な要因も影響して、山口県人のアジア観はことのほか熱気を帯びたものでした。こうした指向は山口高等商業学校の東亜経済研究所（昭和11年設置、現山口大学東亜経済研究所）へと受け継がれることとなります。

尾中の経世済民の目線や分析は鋭いものであったと評価されますが、そこに流れていた優越感という名の先入観には注意を払う必要があるように思います。

北海道やアジア各地（台湾・朝鮮・満洲）、つまり近代日本人にとっての「新世界」の繁栄ぶりを伝える記念写真帖には、必ず、先住民の風貌や生業を記録した写真が数点掲載されています。

